



矢島 渚男 選

蠟梅の光の束となり集う

仙台市 内海 恵子

【評】北の国では春を告げて初めに咲く樹は蠟梅であろう。黄色い透明感のある香り高い花。一斉に咲く様子を「光の束」で見事に表現した。凍て付く空に待つというところを

松江市 三方 元

【評】蛹の状態で厳しい冬を切り抜ける昆虫たちの大自然に適応した生き方に感嘆しているのか、羨んでいるのだろうか。人間は冬眠も出来ずに戦争などをしてはいる。

双六を先に上がつてさみしき児

千歳市 鶴谷 雪子

【評】サイコロの遊びで上がったも嬉しくはない。能力には関係なく単純すぎる。参加している間が楽しいだけ。そんなことが他にもありそう。

四条大橋真ん中の寒念仏

大阪市 今井 文雄

燃え尽きるまで見る役目とど焼

下田市 森本 幸平

動くもの何ひとつなく初景色

堺市 原山 桂子

またも出た初場所宇良の伝え反り

国分寺市 加藤 武夫

風花や峠の茶屋の檜皮葺き

浜松市 久野 茂樹

承らへし心の闇やどんと焚く

仙台市 松岡 三男

鳥言葉研究する人冬帽子

川越市 福田 真弓

高野 ムツオ 選

空つ風五十万羽の居た鶏舎

栃木県 あらみひとし

【評】毎年、鳥インフルエンザが猛威を振るう。かつて五十万羽も殺処分した大規模鶏舎があった。空つ風が吹き付ける空っぽの鶏舎が、命とは何かとの命題を突きつける。素戔嗚の天下るごと虎落笛

土浦市 細井 五男

【評】虎落笛は素戔嗚が高天原を追放され出雲に降るときあれすさぶ音をつくりだすという。神話世界に及ぶ想像力が逞しい。

箱穴に肩まで入れて歳末くじ

鳥取県 谷田小夜子

【評】箱穴は抽選箱の穴のことだろう。大きな抽選箱の底に指を探らせ、何とか歳末くじの特賞を当てようとの懸命な表情も見えてくる。

縄飛びの叩きつけて地かがやく

東京都 望月 清彦

水鳥の目覚めておりぬ羽

小金井市 高橋 広子

隠り沼に冬日あふれる額の中

小山市 中沢 清

からことと笑つてをりぬ舞ふ落葉

日高市 野口 明良

壇輪展出て落葉の令和かな

川口市 清正 風葉

叔母等来て花咲くごとく蜜柑剥く

神戸市 山口 誠

雪を掻くその人に雪降りやまず

町田市 枝沢 聖文

正木 ゆう子 選

ひとつ年取つて大鷹今年も来

大阪府 池田 寿夫

【評】毎年来る個体だから、年齢を重ねたことがわかるのだ。上五中七を句踏りでゆつたりと詠み、下五に言葉を決めたメリハリが巧み。句中での「大鷹」の位置がいいのだろう。冬將軍激情型の男かな

東京都 本多 明子

【評】近頃の激しい気候変動を思えば、冬將軍は夏の炎帝とともに、確かに激情型。対して春の佐保姫と秋の竜田姫の出番が少ないこのごろ。チョコレート買ひにくき日やバレンタイン

静岡県 小川 健治

【評】ただただ普通にチョコレートが食べただけなのに、この日に限って、何か思われそう。おまけに売り場には行列が出来ていたりする。雑巾の絞り方知る冬休み

土浦市 今泉 準一

寒卵煙々と喉通りけり

東京都 天地わたる

幼らの帰りに後に雪とつと

会津若松市 真壁みどり

初鏡女でありし日の憂ひ

相模原市 金本 節子

卒寿なりなにはともあれおらが春

高槻市 松崎シズノ

てんでんに猫づくま枯葉かな

川崎市 多田 敬

弾始吹きつさらしの駅ピアノ

甲府市 村田 一広

小澤 實 選

返り血いとわす寒鯉をさばくかな

神栖市 山上ふみ子

【評】「返り血いとわす」から、戦場を想像するのだが、さにあらず。寒鯉を調理しているというのだ。鯉は生きている、刃を入れたら、血が飛びこもあろう。天然の氷切り出し飛ぶ切粉

さいたま市 新原 健

【評】次の夏に使うために天然の氷を池などから切り出している。「飛ぶ切粉」に臨場感を味わう。勢いよく作業していることが伝わる。氷瀑に刺すハーケンのおせり

川越市 益子さとし

【評】凍りついた滝を登っている。手を掛けるところの何もない氷の表面に、ハーケンという釘を打ち付けているのだが、緊張を覚えている。木菟突いて壇輪の兵土地に伏せる

霧島市 秋野 三歩

ドリブルを縦横無尽風光る

藤沢市 金子真悠美

畔焼きの祖父の赤シャツ千曲川

北杜市 駒野目信之

リビングに置く滑り台春を待つ

神戸市 遠藤 音々

初産のものこそよけれ寒卵

埼玉県 西村 房男

吸って吐いて心臓検査春を待つ

柏市 小畑 昌司

寄せ鍋にうちのルッコラこれでもか

熊谷市 松葉 哲也

短歌あれこれ

江戸雪（歌人）

満員電車にて

満員電車に乗っていたときのこと。座っている一人が、ずいぶん浅く腰掛け、スマートフォンに夢中になってやがて寝始めた。長い足が前に突き出ているため、吊り革を持って前に立つと膝がぶつかってしまう。自然とその人の前には誰も立たない。きゅうきゅう詰めの車内。少しでもスペースが欲しいところなのに。少し苛つく。

こういうときは、うたに詠むべく、さりげなくその人を観察する。これがなかなかいい精神安定剤になるのだ。よく見ると知り合いの××さんに似ているな、お肌がツルツルだ、どんなスキンケアをしているのかな、などと考えていると笑えてくる。ただしあまり夢中になると乗り過ぎてしまうのだ。

△席あさく腰かけねむるうら若き膝に触れたるこの膝さみし江戸雪▽

そのとき作った。ちょっとと美化しすぎたかもしれない。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭